

## 専門と教養の間で —領域別科目を中心に

日 時：2011年11月10日（木）18時20分～20時30分

場 所：立教大学池袋キャンパス 太刀川記念館3階多目的ホール

### 発 題：

平野 隆文 本学文学部教授  
全学共通カリキュラム運営センター  
総合教育科目構想・運営チームリーダー

### 発言者：

〈人文系〉 西原 廉太 本学文学部教授  
〈自然系〉 家城 和夫 本学理学部教授  
〈社会系〉 小川 有美 本学法学部教授

### 司 会：

中島 俊克 本学経済学部教授  
全学共通カリキュラム運営センター  
総合教育科目構想・運営チームメンバー

### コメンテーター：

寺崎 昌男 本学総長室調査役

### 〈開会挨拶〉

○司会（中島） それでは、時間になりましたので、今年度全カリシンポジウム「専門と教養の間で—領域別科目を中心に」を始めたいと思います。私は司会を務めます総合チームメンバー、経済学部の中島俊克でございます。どうぞよろしく願いいたします。

では、まず初めに、今回のシンポジウムの趣旨説明を含めまして、全カリ部長の青木先生、お願いいたします。

○青木 全カリ部長の青木でございます。本日はお忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。正

面に出ておりますように、今年度の全カリシンポジウムは「専門と教養の間で—領域別科目を中心に」というタイトルを掲げさせていただきました。

全カリは



青木 康



中島 俊克

発足以来、基本的に1年に1回、ほぼこの時期だと思えますが、シンポジウムを企画してまいりました。全カリのシンポジウムということではあるのですが、必ずしも立教大学の全学共通カリキュラムという枠組みだけに限った話ではなくて、もう少し広く一般的にいうと大学教育にかかわるいろいろな問題を取り上げております。

ただ、今回は2012年に総合のカリキュラムが大きく変わるというところで開かれるシンポジウムです。特にこのたびのカリキュラム改革では、領域別科目という、総合教育科目の中のある程度大きなジャンルを新たに一つくりました。その部分は、実は学部で行われている専門教育の、例えば学問の体系性であるとか、一時期よくしていた議論では、ディシプリンとかいうことを言っておりましたが、そういうようなものを教養教育の中でどのように見せることができるのか。どのように学部以外、例えば経済学の科目で、経済学部以外の学生にそれを教養科目として伝えていけるかといったことを、一つの試みとしてやってみようということをつくった科目群です。とりあえず、メインタイトルとして「専門と教養の間で」ということを掲げさせていただいて、少しそのあたりを中心に考えようということとで企画しました。

実際には、このあと、発題者は総合

のチームリーダー、そして、ちょっと古くさいと言われるかもしれませんが、人文、自然、社会という、伝統的に教養教育を考えるとときに言ってきた3つの分野それぞれから少し発言をいただいて、そして全体の討論というような方向へまいるのですが、来年度のカリキュラムについての具体的な話のほうに寄っていくか、あるいは、もう少し抽象的に、それこそ「専門と教養の間で」というような話になるかは、これからの発題者、発言者の雰囲気次第というようなところもあるかもしれません。それで議論が盛り上がるのであれば、必ずここへ収束させなければならないという話ではないと考えています。本日のこのシンポジウムが意味ある成果を挙げることができるように、皆さんの積極的なご参加をお願い申し上げます。ありがとうございました。

○司会 青木先生、ありがとうございました。実を申しますと、私自身、チームメンバーではあるのですけれども、この2012年度の改訂は、戦々恐々と申しますか、少人数で「経済学を読む」というのをやることになっておりますが、どうやったらいいか、自分自身悩んでいることですので、司会とは言いながら、このシンポジウムの中身を大いに楽しみにしているところであります。

では、引き続きまして、リーダーの平野隆文先生、よろしく願いいたします。

### 〈発題〉

○平野 皆さん、本日はお忙しい中、お越しいただいてありがとうございます。文学部フランス文学科に所属し、総合教育科目構想・運営チームリーダーを務めております平野と申します。よろしく願いいたします。

今日皆さんにお配りした「全カリシ



平野 隆文

ンポジウムメモ」というメモですが、扱いに注意していただきたいと思います。これは、今日の登壇者だけに配って、私がどういう話をするかということをお伝えしたものです。ポイントだけを皆さんに提示して、私が領域別科目について言いたいことに関して幾つか申し上げるということになっております。また、この後、2012年度より新しくできる領域別の文献を使った科目というものの模擬授業を簡単に、非常に圧縮した形でを行います。このメモを逐一読むことはいたしませんけれども、時間がございませんので、非常に早口で話しますから、その点をご容赦ください。

まず、「総合新カリキュラムの概要」について、ご存じない方もいらっしゃると思いますので、簡単にご説明申し上げます。全体的な枠組みとしては、それ以前のカリキュラムと比べて、ものすごく大きく変わっているわけではありません。今日は領域別科目群というのが主題になるわけですが、立教科目群というのは、これは「立教A」、「立教B」というふうに分けて、講義系とゼミナール系に分けます。講義系のほうは「宗教」と「人権」と「大学」、これまでは、そのほかいろいろあったんですけども、拡散していったものをこの3つに集中させて、そういった主題を扱うものにします。「立教B」というのはゼミナール形式ですから、従来の「立教生の学び方」とほぼ同様です。次に、主題別の部分ですが、これは今の「総合A」と「総合B」をほぼそのまま引き継ぐけれども、370コマぐらいあったものが240コマに減ることです。その分、領域別にいくということですね。スポーツ実習のほうは変更ありません。

総合教育科目新カリキュラムの枠組

分野・科目群		単位数	
立教科目群	立教 A (講義系)	6	
	立教 B (立教ゼミナール)		
領域別科目群	領域別 A (講義系)		
	領域別 B (文献系)		
主題別科目群	主題別 A	A1 (人間の探究)	14
		A2 (社会への視点)	
		A3 (芸術・文化への招待)	
		A4 (心身への着目)	
		A5 (自然の理解)	
主題別 B			
スポーツ実習科目群	スポーツプログラム	20	
	スポーツスタディ		
合計		20	

領域別ですが、これはそもそも、各学部の学生がほかの学部の専門の入り口のところをのぞくというものです。自学部の学生は所属学部の授業を受けることはできません。これに関してはいろいろな議論がありまして、その議論の経緯について触れることはいたしません、そのような仕組みになっております。ですから、例えば理学部の学生が文学部に受けに行く。あるいは、経済学部が法学部に受けに行く、ということです。

領域別のAとBの違いは、Aは講義をする。Bも実は講義です。講義ですが、それぞれの学問における古典ないしはそれぞれの学問における第一級の文献、あるいは文学部で言うならば立派な文学作品、そういったものを読んでいく、あるいは読んだことを前提に講義を行うというものです。

それでは、「全カリシンポジウム用のメモ」というほうを見てください。これはメモ用に書いたもので、何の制約もない中で言いたい放題筆を滑らせていますので、私はちょっと暴言癖がございまして、ですから、扱いは注意をしてください。外部の方もいらっしゃるかもしれませんが、誰にも見せないでください。お願いします。

文献系についてですけれども、これは文献を読ませた上で講義をするという科目を想定しています。ただし、講読や輪読の形式を排除するものではありません。

領域系というのは、ほかの学部で履修するわけですから、自分たちが普段接している学問の方法とは違った方法論、あるいは中味に接するということによって、ある意味での異文化接触を行うという特徴を持っております。同時に、自分の学部生以外の人を教えるのは意外と難しい。難しいことを簡単に語るののは難しいということについ

て、一つだけ具体例を挙げておきます。1980年代、90年代にフランスが発信地となった現代思想というのが、いまだに流行っていますがけれども、非常に盛り上がったことがあります。そのときに、アラン・ソーカルとジャン・ブリクモンというアメリカの物理学者と数学者が、現代思想家といわれる人たちが使う数学や物理学の概念があまりにめちゃくちゃであることに怒り狂って、自分たちでそういった概念をハチャメチャに使ってすごい論文を書いたんです。私もちょっと読みましたけど何を言っているか全然分からない。それをアメリカの現代思想専門の雑誌に投稿したところ、素晴らしい論文であると評価されて、それで何か賞をもらったかどうかは忘れましたが、実は、これは全てでたらめであるとあとで暴露して、結構大騒ぎになったことがあります。これはソーカル事件といえます。

そういったことに陥ることは、今の大学の先生方では少ないとは思いますが、難しいことをできる限り簡単に、いわば門外漢の人に教えるということが重要であろうということを上上げておきます。

その次は、たぶん最も反論が予想されるところでしようけれども、私は他の大学からここに来まして多少驚いたのは、あらかじめもう結論が見えている、「人権」とか、「ハラスメント」とか、「ジェンダー」とか、「生物多様性」とか、「異文化共生」、そういうものが非常に多い。そういった目的地があらかじめ見えているものを教えるということには、内田樹氏も言っているように、ある意味で学問のどきどき感とか、わくわく感とかいったものがない、一種の教育パッケージなんじゃないかと思うのです。

同様の問題で、今度はシラバスのこととなりますけれども、1番何々、2番何々、13番、14番と、そういうふう



して目的地が分かっているような一種の商品パッケージのようにしてしまうと、学問の世界にある種の市場原理を導入するというようなところがありますので、私はこういったやり方には反対です。ですから、なるべくスリリングな主題を選んでやってください。それによって、こっちの学問のほうが面白いといって、学部が変わることがあって、ほかの学部がつぶれちゃっても、私は知りませんよという無責任なことが書いてあります。

先ほどから異質な学問に触れると申し上げておりましたが、そもそも異質といっても、例えば貨幣とか国家とか経済ということ論じるに当たって、これは実学系とか社会学系とかよくいわれますが、そういったものも実は目に見えないものを扱っているということでは、文学、古い言い方で言えばいわゆる人文学ですね。それとそんなに変わらないんじゃないかということですね。つまり、貨幣がずっとあるわけではないし、円がずっとあるかどうか分からないし、日本という国もずっとあるかどうか分からない。それは国家という言葉や、あるいは貨幣という言葉やを授業で使ったときに、そういったものが未来永劫存在するという前提のもとにしゃべりかつ聞いているわけですね。そういった点では、実際には目の前に存在していないものについて議論

をしているわけですから、学問にはそういう側面があると思います。

魚を釣るふりをしながら、実は魚は釣っていないという側面がいかなる学問にも共通して内在しているんじゃないかということを書きました。

それから、もう全く思いつきに過ぎませんが、これは文学部的な発想で、自分の中に抱え込んだ喪失感とか、自分の中の邪悪さに対する嫌悪感とか、そういったものを乗り越えていって成長していく物語はこの世の中にたくさんあるわけで、パスカルの『パンセ』とか、フルニエの『グラン・モーヌ』とか、誰でも知っているバルザックの『ゴリオ爺さん』とか、フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』ですか。ドストエフスキーの『白痴』とか、そういった作品等を通して、ある意味で今の学生は単一的な価値観の中でずっと生きてきたという人が多いので、そういった人たちに成熟の機会、つまり葛藤というものを乗り越えて成熟するという体験を求めているのです。この発想自体が古いという批判はあえて甘受しますけれども、私は、これは非常に重要なことではないかなと考えています。

以上お話したことについて、本当はもっと細かくやりたいんですけども、ちょっと文献系の科目というのが、理学部には事情があってなくなってしまいましたけれども、それ以外の学部にはあるわけですから、簡単にこれから模擬授業をやります。これはあくまで一例です。家で読んできたことを前提に授業をしてみますので、ちょっとお聞きください。

【この後、2012年度より開講予定の領域別科目模擬授業が行われた。】



## 〈人文系〉

○西原 文学部キリスト教学科、西原廉太と申します。よろしくお願ひいたします。

今の平野先生への模擬授業のリアクションをしたほうが、楽しいような気がいたしますが、私たちに与えられた務めは、領域別科目とその周辺領域です。平野先生が書かれたメモについて少しコメントをしたいと思っています。

人文系の代表のというかたちでの発言を依頼されておりますが、私も当初、この総合科目の改革に多少関わったということとキリスト教学科であるということも含めて、領域別科目を中心とする今回の改革について、少し語らせていただくということをご容赦いただきたいと思ひます。

今回の領域別科目は、要するに、学部提供科目ということなんです。私は今回の、2012年度全カリ総合科目の改革の肝は、まさにこの学部提供にある考へています。実は、部長会や教育改革審議会などでもかなり反対があり、各学部の先生方におかれても、抵抗感が強かったかと思ひます。青木先生、平野先生のご努力の中で、さまざまな反対を乗り越えて、来年からこの領域別科目が始まるというのは、大きな意義があるのではないかと思ひます。

なぜかと申しますと、全カリが始まってもう10年以上経て、なんとなく雰囲気としてですが、教員の中では、全カリはエキストラの仕事といひますか、余計な仕事といった雰囲気がただようようになりました。兼任コマがつけば全カリに回したり、そんな雰囲気が発足当初と変わったところだと思ひます。

本来の全カリの趣旨は、全教員で支えるということでした。そこがある種、大事な趣旨であったわけですが、それが、どちらかという、もうエキスト

ラの範囲に入っているという現状から脱却したい。つまり、専門科目は一生懸命やるが、全カリはちょっと…ということではなく、専門科目を教えるイコール全カリ

科目であるということにしたい。ですから、当初は確かダブルコードの提案をしていたと思ひますが、それは結局、実現しませんでした。つまり、自学部の専門科目となり得る労力をかけて、全学部の学生に対して科目を提供する。まさにそこが今回の改革の一つ大事な点です。ですから、科目数的にはそれほど多くないのですが、この科目群が入るといふことの意味は、私は限りなく大きいものがあるだろうと思ひます。

そしてまた、今、平野先生がおっしゃったとおり、難しいことを簡単に述べる。もっと言ひますと、本物の学問や学問の難しさに触れさせていくといった内容の提供をすると。これがまさに、そもそも全カリの理念であったのではないかと。そこをもう一度確認したい。そこが私にとりましては、この領域別が置かれることの意味であり、シンボリックにも、領域別科目群は必要であると考えております。

もう一つは、やはり個人的な思ひ入れもありますが、本物のリベラルアーツを地でいきたい。そのような願ひがあります。先生方には言うまでもない



西原 廉太

ことですが、いわゆる近代の大学のルーツである12世紀、13世紀のパリ大学、オックスフォード大学やケンブリッジ大学などに見られるリベラルアーツの源流ですね。そのあたりをもう一回たどることも、立教大学ならではの思います。そもそも、学問の根拠というのはどこにあるのかといいますと、創造者である神の計画を自然の中に読み込むことにあるということがあります。つまり、私たちには神から与えられたテキストが2種類あるという考え方は、第一の神から与えられたテキストは、聖書ですね。聖書を中心とする古典も入ります。神が書いた第二のテキストというのは、自然や宇宙や人体です。そのような考え方が、当時の12、13世紀の大学、学問の世界にはいかんともしがたくあったと思います。

ですから、面白いのはこの世界、社会、あるいは宇宙、人体がテキストだという考え方は、それを読む。自然を読む、宇宙を読む、人体をテキストとして読む、社会をテキストとして読む。それがそもそも学問のルーツであり、そういったテキストである自然、宇宙、世界を読み解くことを通して、神のクリエーション、神秘、ミステリーに近づいていこうとする働き。これがもともと学問の課題であった。そのための基礎訓練、作法を身につける場がリベラルアーツ、自由七科であったということであろうかと思います。

パリ大学、オックスフォード大学やケンブリッジ大学などでは、それらのリベラルアーツを担っていたのが文学部や哲学部でした。私は、立教大学の文学部の英語表記は何でしょう、とよく文学部の学生に聞くのですが、よくある答えは、College of Literature。それは間違いで、我が文学部はCollege of Artsを名乗っているわけです。それはCollege of Liberal Artsを準用している

わけで、そういう意味では、立教大学の文学部の教員が全カカリに、献身的に率先してかかわるのは義務のようなものだと私は考えています。

先ほどの、神が書いた、神から与えられた第一のテキストであるところの聖書をはじめとする古典を読み解くために置かれたのがリベラルアーツの7科目のうちの3科でございました。文法、修辞法、論理学です。そのために必要な言語がラテン語であり、ギリシャ語であり、ヘブライ語である。文学部が基幹科目というところにこの古典3語を置いていることの意味、受講者は大変少なく、非常に効率は悪いのですが、それでも置く意味がそういうところにあるわけです。それはもちろん他学部の学生も履修できます。そういった古典、ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語が、第一のテキストを読み解くために必要な言語であった。

一方で、第二のテキストであるところの宇宙、自然、世界、人体。それらのテキストを読み解くための科目が4科目ありました。算術、幾何、音楽、そして天文学という4科目がありましたが、そのために必要な言語が数学であった。ですから、数学というのは言語である。もっと言うと数学は神学的言語である。その辺がリベラルアーツの源流ではないか。

今回の総合科目の改訂の柱である領域別科目のテキストを読むという作業は、まさにリベラルアーツ本来の考え方を地でいくものだろうと思います。徹底して、テキストを読み込んでいくということであろうと考えています。徹底してテキストを読み、読むことにこだわる。それが今回の領域別の大事なポイントであろうと考えます。

つい最近、ご記憶かと思いますが、大学基準協会の認証評価の実地調査がありまして、その中で、立教大学のキ

リスト教主義が、正課を含めてどこに具現化されているのかが見えないという問いが付けられておりました。

2009年、世界の重要な聖公会の重要なキーパーソンお二人を立教のチャペルにお招きして、実は意図的だったのですが、同じ演題でご講演いただきました。お一人はローワン・ウィリアムズカンタベリー大主教、世界聖公会の中心です。もう一人は、我が立教をつくったアメリカ聖公会の総裁主教でありますグリズウォルド主教です。お二人には、「現代社会における聖公会大学の使命」という表題でご講演いただきましたが、お二人のお話は共通するものでした。それはどういうことかという、時間がありませんのでまとめて言いますと、大学とは真理を味わう場であると。また、学生、教員というのは、真理を探究する旅人であると。また、大学は学生のキャラクターを形成する場であると。この場合のキャラクターというのは、単に性格ですとか人格とかいう意味ではなくて、自らの弱さや不確かさを自覚する変化を恐れない精神ということなのですが、そのようなキャラクターを形成できるかどうかということが、キリスト教大学、聖公会の大学に、立教大学に求められていると。

結果的に、大学というのは真理を探究するために、常に開かれていなければならない。閉じられてはならないということだと思ふんです。自らが試されて、自らが否定されることを恐れてはならない。そういう意味でキリスト教大学とは、危険な場でなければならないという言葉がありました。dangerousな場とならなければならないと。立教はそういうdangerousな場になっているのかということが問われているのだらうと思ふます。そのような経験を、今回の領域別科目を通して学生たちに味わわせたい。学生たちに、まさに真理

を味わわせる。これは、「教育パッケージ」にはなり得ないです。わくわく感とか、どきどき感とおっしゃいましたが、予定調和にはならないことの大切さがやはりあるのだらうと思ふます。

キリスト教科目は、一方で2012年から3倍ぐらい増えるんです。大変ありがたいことです。1997年の全カリ発足時と同じぐらいの科目数に増えたことは大変感謝なのですが、しかし一方で、私たちのキリスト教教育というものが、文字どおりキリスト教科目を必修にしているかどうかですとか、科目数が多いかどうかというところにあるのではなくて、先ほど述べたような意味で真理を味わわせているかにかこそあるのだと思ふます。平野先生は内田樹氏を引用されて、「言葉が意味を受肉する瞬間の知的興奮に学生を引きずり込む」と言われた。まさにそのとおりだと思ふます。聖書の話をしなすと、「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」。これはヨハネの福音書の1章にあるものです。あるいは、ヘブライ聖書、旧約聖書ですが、エゼキエル書の3章1節には、「この巻物を食べなさい。そして、食べてから行って話しなさい、語りなさい」という言葉があります。そのような感覚ですね。巻物を食べるとか、言葉が肉となる。まさにそのようなダイナミズムに触れさせることが、立教の担うべき教育でしょうし、それが領域別科目なののだらうと思ふます。実は領域別科目は優れてキリスト教科目である。このようなことを言うと、平野先生は激怒するかもしれませんが(笑)、私はそのように考えているわけです。平野先生のメモは多少、過激ではありますが、実にまっとうである、原則的に正しいと思ふます。

しかし、1点だけ。全カリに内在する正義のイデオロギー批判については、もう少し丁寧に議論をしていく必要を



感じました。先ほど述べました12世紀、13世紀の初期大学の話なのですが、神学部、医学部、法学部の3学部でしたけれども、神学部を卒業すると司祭になるわけですね。法学部を卒業すると法律家になります。医学部を出ると医者になります。この3つの職業が、いわゆる聖職者と呼ばれた3職業ですね。職業という意味の英語に vocation という英語がありますが、これはもともとラテン語の vocare という言葉から来ています。vocare というのは「召命」のことで、これは要するに、神によって使命が召されるという意味ですね。それが天職なのです。

この司祭、法律家、医者いう3つの職に共通していたミッションとは何かといいますと、痛みを負った人々や苦悩を負う人々、苦しむ人々に近づいて、ともにその痛みや悲しみを担いながら、その人に徹底して深くかかわることなのです。それはまさにイエスのミニストリー、働きに倣うことであつたわけでありまして、たしかに、イエスという人は最高の司祭であつて、法律家であつて、また医者であつたということです。

大学の存在理由は、ミッション、使命とは、このような意味での vocation ですね、「聖職者」たちを育てることにあつたということは思い起こしたいと思います。つまり、他者の痛みに気づいて、その苦しみに共感してかかわることのできる者たちを育てて社会、世界へと送り出す。その使命を私たちは忘れてはならないし、そのような主題を扱う教育を行うことは、実は決して、今どきの、「流行の現代の正義」ではなくて、極めて伝統的かつ学問的正義の根幹をなす要素であると私は考えております。

## 〈自然系〉

○家城 理学部の家城でございます。ちょっと格調高い話のあとで、割とブラクティカルな話になるかと思ひます。昨年、この領域別科目を2012年度からスタートさせる、という議論があつた際に、さっきも学内でさまざまな抵抗があつたという話がありました、たぶん最後まで抵抗したのが理学部だつたと思ひます。

では、やることになつて、これをどう考えればいいのかということで、少しお話をさせていただければと思ひます。「自然科学」から見た立場ということですね。

さっきの平野先生のお話のところ、今日のメモを見ていただければ分かりますけれども、領域別科目というのはどう定義されているか、それは、学問的な特性、特徴や整合性を典型的に示すものだということです。そういう意味ではディシプリンを支柱にするものである。その学問分野を俯瞰的にとつたわけ、これはなるほどなと分かるわけですね。

さらには、平野先生のメモのところでありましたけれども、異質な思考法が適している。それはもっともな話だと思ひます。いろいろな教養といった場合に、やっぱりそれを相対的に見る自分の立ち位置をはっきりさせるということが教養としては基本的な、原点になることだと思ひますので、俯瞰的思考を持つという意味でそういう科目がある、ということまでは非常によく分かつたというわけですね。

ところが、ちょっと意外というか、あれつと思つところは、平野先生の話の中で、「スリリングな主題、未知の領域、わくわくするものを選ぶべきだ」というのは、もともとは専門科目をほかの学部の方にも分かりやすく授業をすつと言つ



家城 和夫

ていたものとは、何かちょっと違う。そこで私なりに少し整理をし直してみようかと考えました。どう整理したらいいのか、随分いろいろ悩みました。それに、もう一つは今日のタイ

トルですね。「専門と教養の間」というのは、何なんだというのが余計に分からなくなってきたということです。

スクリーンに表示されているのは、たぶんお分かりだと思いますが、スイスのアルプスですね。有名な山が幾つかあって、こういう非常に美しいところ。この絵を使って私の持っている「領域」のイメージがどんな感じかということをやっと理解していただこうと思います。こういう風景があったとして、専門に相当するところは、たぶんやっぱりこういう山々なんだろう。それぞれの頂きを目指して大学に入る。それぞれの専門分野を極めたいと思います。学生は入ってくると思います。頂きが幾つもあるし、近い峰もあれば、遠い峰もある。では、教養は何なんだろうかという、そのふもとに広がっている、その全体を支えている部分が教養なんじゃないのかなと思います。

そう位置づけた場合に、では、領域ってどこなのかということですが、次年度からはじまる領域別科目というのを考えた場合に、それぞれの専門を分かりやすくほかの専門の人がやるという

ことになる、この山のふもとという、途中までという、中腹までという、そのあたりのことを見るということではないか。自分の登りたい山と違う山に少し登ってみて、自分の山を見たときにどう見えるだろうか。そういうことを考えるのが領域なのかなというのが私なりの理解です。

では、いわゆる総合科目はどこか。これもよく分からないのですが、例えば、山と山がつながっていたりしますので、山は孤立して存在しているわけではありませんから、それぞれの山の間に関係が出てくる。その峠みたいなところなのかなと思っています。

そういうふう位置づけたとして、では、ここで自然系ということが絡み合ってくるわけですが、自然系のことを人文系、社会系の方に理解してほしいという場合、先ほど、西原先生の問いにありましたが、自然科学というのは、基本的に数学の言葉で語っているわけですね。それはリベラルアーツのころからという、もともとからそうなわけ。そういうものを理系ではない方に説明するにはどうすればいいか。たぶんこの辺から理学部でそういうものを受け入れるのが難しいというのが出てきたのだと思います。ディシプリンを教えたい。そうすると、専門の学生でもそうですけれども、そういう言葉、つまり数学で書いてあるものを学ぶためには、その言葉のトレーニングが最初に必要であるということになろうかと思いません。そのトレーニングがない学生に、それをいきなりやる。今の山で言うと、最初に山に登る前には、ふもとである程度、体力をつけてトレーニングをして装備をして、それから登り始めるわけで、我々立教大学でも3年ほど前に3つのポリシーをつくりましたけれども、アドミッションポリシーの中で、学部ごとにそれが違うわけですね。数

学的なトレーニングをある程度経てきた学生。もう早い段階でそれを投げてしまった文系の学生。いろいろな学生がいる中で、共通して専門の科目を分かりやすく教えるということが、果たしてできるだろうかというのを考えてみると、疑問に思ってしまうわけです。

ですが、やることになって、では、理学部が提供する中の領域系がないという話はまたあとで触れますが、科目をどうするかというと、仕方がなしに、私の場合は物理ですから、「物理学入門」とか「化学入門」とか、こういう科目を置いてこれを提供してきた。本当にそれでできるのかと思ってしまうわけです。平野先生のメモにある言い方で言うと、専門の内容を優しく語るのは難しい。これは難しいだけではなくて、たぶんできないのではないかと思ってしまうぐらい難しい。でも、自然科学をほかの分野の人文、社会の人に伝えることは必要である。そうすると、やっぱり別のアプローチを考えるべきなのではないかなと思いました。

では、何が可能なのか。その辺で私は止まってしまうのですが、それに簡単な答えがあるぐらいであれば苦労はしないわけですけれども、要するに何をしたいかということ、我々自然科学をやっている者の立場で、ほかの学部、文系の方に対して何をしてほしいかを問うことですよね。そうすると、問題の立て方としては、ここでは自然科学ですけれども、あなたにとって自然科学とは何ですかという問いにどこまで答えられるかということになります。これだって十分大きな問いで、そんなに一言では言えない。

さて、別に平野先生に触発されたわけではないですが、模擬講義というか、ちょっとエクササイズです。

例えば、最近よく耳にというか、目にするマイクロシーベルトという単位



がありますね。恐らく今、ほとんど毎日のように新聞に載っていますが、1年前であれば、恐らく我々の分野しかこの単位を使って仕事をしていなかったと思います。これって何だと思えますか。今だと、例えば、1マイクロシーベルトだからどうか、100だから危ないとか、ある意味、生活に密着しているわけですね。

○平野 一定時間に放射する量でしょうか。放射能自体ではなくて、その放射能を放射している物質が放射している放射能の量でしょうか。

○家城 近いですね。実際は人が浴びたときに、それがどのくらいエネルギーとして吸収されて、それが人体に影響するかという、結構ややこしい数字です。この3・11以来、自然科学者は、特に立教の場合、原子核とか素粒子とか宇宙という分野が近いのですが、いろいろなところで聞かれるのですが、みんな聞かれるのは、「どの数字だったら安全なのか」ということです。世間一般でもそうだと思うんですが、結局、ボトムラインですね。ここが振り切れて危ない、逃げるべきか、そうでないか。そこだけを知りたいんですね。でも、本当にそれでいいのか。例えば、福島であれば、避難区域があるけれども、それはどこから線を引いて、どこまでだったら帰っていいとか、いけないとか、それを議論する。当然、我々一般市民であっても、例えば、ここがそう

いう状況になったら、みんながそれを判断しなければいけなくなるわけです。そのときに専門家にそれも任せていいのか。誰かこう言った、別の人が違う言い方をした。では、一体誰を支持するのかという次元になってしまう。そうではなく、やはりちゃんと伝える、理解する必要があると思います。

今、平野先生が言われたように、これは放射線に関係している。では、放射線が問題だとして、放射線って一体何なのか。なぜそこから出てくるのか。なぜセシウムが出てきて、ヨウ素が出てきて、実は問題はいっぱいあるんです。それに自然科学は全部答えを出せるものなんですが、みんなそのところはすっ飛ばして、結局、最後の結論だけ見せる。その状況はやっぱりまずいし、我々はそういうことをちゃんと伝える努力をすべきだし、やっぱり大学を卒業、リベラルアーツをとって卒業した学生は、それを考えるだけの能力を持ってほしいというのが一つあるかと思っています。

そういう観点で見てみると、例えば、こういう領域系といった場合に、問題は例えば、高校で数学や理科系の科目をとっていないとできないということです。では、高校の科目を大学でもう



一回教えるというのが、本当に意味があるのか。また、それを繰り返したとき、いったん、これは自分には合わないと考えた学生が受け入れてくれるのかということ、

ちょっと違うのではないか。むしろこれにアプローチするとすると、例えば、具体的な問題でもって、あなたにとってこれがどういう意味を持っていて、これからそれがどう役に立つのか。そういう観点で持ってくるべきなのではないかなというのが、私の漠然としたアイデアです。

これは私が来年、担当するわけではないので適当に言っているだけなんです。私がもしやるとしたら、例えばそういうアプローチなのかなと思います。

でも、そうやって考えてみると、実は、これは領域別なのか主題別なのか。昨年の議論でもそうでしたけれども、全カリからいわれたのは、新書系とかいう言葉で説明されたんですが、目的とするところはやはり科学は何かということを理解してほしい。そのアプローチの仕方というのは、「テキスト」というふうにはいかないのではないかなと思います。

それでもう一つ、先ほどから出ていますが、理学部だけは文献系をやらない。これも昨年の議論の結論で出てきたんですけども、自然科学にも確かに古典はいっぱいあります。たぶん皆さんが一番ご存じかと思うのは、ニュートンが今の世界のベースをつくっていますが、その主著が『プリンピキア』ですね。我々理学部の先生の中で『プリンピキア』をちゃんと読んだ人がいたかということ、いますかね。ひょっとしてこの中にいるとまずいですが、私は少なくともぼらばらと見たことはあっても、読んだことはない。例えば、今の自然科学、物理系でいうと、量子力学というのがいろいろなもののベースになっていますが、そのベースをつくった、有名な、ノーベル賞を取ったニールス・ボーアというのがいるんですけども、ニールス・ボーアの著作は岩波文庫でも手に入りますが、むちゃ

くちや難解で何を言っているか分からないんです。アラン・ソーカルとは全然違う、まっとうなことを言っているんですが、でも、やっぱり全然分からない。

では、それを自分で読んでも分からないのに、学生に読ませるかということ、これは無理だろうということ、文献系というアプローチは難しい。恐らく山のたとえの言い方と言うと、最初にいろいろなものが見つかったときはけもの道というか、そこら辺をうろろろしてやっていて、右往左往やって見つかったわけですが、今は、そこは舗装されてハイウェイになっているわけです。ハイウェイで行けるのに、なぜそんな道を探らないといけないのかと思ってしまうということです。

科学史的にはもちろんそういうところも重要なんだけど、恐らく自然系でそれをやるというのは効果に対してかけるコストが高すぎるであろうと思います。

最後に、ここまで理学部の教員として、ほかの学部の方にどういうことを提供すべきかという観点の話ですが、もちろん逆もあるわけで、理学部の学生にとって、では、ほかの教養、こういう人文系・社会系の科目を取るのはどういう意味があるだろうかということですね。これについて最後に触れたいと思います。

スクリーンに表示されているのは、理学部のポリシーの中の学習成果です。理学部の学習成果の中に幾つかあって、そのうち2つが書いてあります。先ほどから話題になっているような自然科学への導入としての自然の論理を全部我々のような理系の人間が、理解すること、ということも大事なんだけど、それを他の分野を学んでいる学生にも伝えるときには、卒業していろいろな職業に就くわけですから、自然系以外の学生がいるところの議論もしなければ

いけない。私もずっと大学の中で生きて、こういう立場になってほかの分野の人に教養について語るということがあろうとは思っていませんでした。我々が授業をしていて、理系で入ってきた学生でもいろいろなことを分かりやすく説明することはすごく大変です。まして、そうでない学生に説明するというのは、もっと大変だと。でも、それができるようになるためには、やっぱり自分のやっていることを、目の前のことだけではなくて幅広い観点で理解しなければならぬ。さっきの例で言うと、山に登るのはすごく大変ですから、みんな足もとの山を一步一步登っていくわけですけども、それだけではなくて、やっぱり時々自分の位置を、外から見て自分はどこに立っているのかというのを理解した上で行かないといけない。これは、広い意味でのキャリア教育だと思います。

最後に、話がちょっとそれますが、先日亡くなられた Steve Jobs というのは、亡くなられたときに気がついたんですが、私と1カ月ぐらいしか年が違わないんですね。私はそれを知ってある意味、非常にショックでした。あれだけのことをやった人が私と同じ年だということが。では、自分は何をやったんだと思うと、非常に悲しくなったんですね。そういう意味では非常にショックですが、逆に言うと、私はまだしばらく生きていられるので、まあ、よかったというところはあります(笑)。

Bill Gates も実は同じぐらいの年です。同世代で。彼らは確かにすごいことをやったんだけど、同世代人間として見ると、30年ぐらい、40年ぐらい前、彼らはパーソナルコンピュータをつくって、ベーシックみたいなプログラム、ソフトウェアやハードウェアをつくって、我々同世代から言うと、彼らはただのおタクですね。自分で、ガ



レージでいろいろなものを組み立てて、好き勝手やっている。オタクであるだけにとどまらず、それをちゃんとエンタープライズして、ほかの人にも使えるようにした。これが、我々の生活や社会においてどんな意味を持っているかということをやちゃんと分かった上で、それを商売にしてお金持ちになったわけですから、それもある種のロールモデルだと思います。オタクがオタクで終わってしまうのではなく、彼らが経営者になるためには、そのとき自分のことだけしてはだめで、やっぱり経営のこと、社会のことを全部考えていた。それがすごく大事だと思うんです。なので、キャリア教育ではあるんですが、やっぱり今の大学にいて時間が十分あるときに、ほかの領域の分野をしっかりと勉強してもらおう。それは理学区の学生にとっても非常に大事なことだと思います。なので、こういう科目ができること自体は、理学区と学生にとっては非常にウェルカムだと思っています。

## 〈社会系〉

○小川 法学部政治学科の小川と申します。今日はすごくライブ感があって楽しいです。平野先生が「全カリニュースレター」に書かれた文章で、先生がなさっていることは黒魔術とか錬金術だと書いてあって、文学部の先生らしい比喻だなどと思いましたが、本当にそのとおりだということ、感激しました。

私の専門は社会科学といっても、政治学という分野です。政治学というのはあまり存在感がないかもしれません。例えば、先ほどの文学部の英語名称が College of Arts という立派な名前でした。ところが、法学部は Faculty of Law and Politics。今は College というんですかね。英語には Politics があるん

ですけれども、日本語では法学部で、政治は省略されておりまして。ディシプリンも、あるという人もいます、ないという人もいます。専門なのか教養なのか、分らないところ

もあるんです。政治学者は生臭くてあまり教養があると思われていないと思うんですが、苜部直さんという日本政治思想の専門家がいて、この人が『移りゆく教養』という本を書いています。この本を見ますと、冒頭のほうにはある東大の先生が、ついにこの日が来たかというエピソードが書いてあります。それは、大学院生が「先生、ドストエフスキーって誰なんですか」という質問をしてきたというのです。しかし、末尾のほうに、本学政治学科名誉教授の栗原彬先生の文章が出てきて、ジョージ・オーウェルの『絞首刑』で、インド人の死刑囚が死刑になる直前に水たまりをよけた。そのこと1点でもって書いた教養論があったりします。栗原先生は政治学者なんです。

それから、最近の苜部さんの別の文章では、本学政治学科の名誉教授で亡くなった高島通敏先生が引かれていまして。学生が就職面接に行き、「『政治学って何の役に立つんだ』と聞かれて全く弱りました」というのを聞いてにやにやしたという話から、政治学とは何かを考えさせるのです。そういう意味では、少なくとも立教大学で政治学



小川 有美

を通して教養というのを考えるということとは、ありかなと思って、本日参りました。

僕は、実は北欧の政治が専門の一つでありまして、こういうことが、自分が2年住んでいたノルウェーで起こったことにとってもショックを受けたんですけど、ノルウェーで反外国人を唱える青年が、連続テロを起こして、ティーンエイジャーの青少年を含む70人以上の人の命を奪ったという事件がありました。この人はある意味勉強家で、彼の書きたいいわゆるマニフェストという長大な文章を読みますと、英語で書いてあるんですね。しかも、注などがきっちりついている膨大な学術論文みたいなマニフェストなんですね。実は、ユナボマーという、数学者から爆破テロリストになった人の文章をかなり流用しているという話もあるんですが、とにかく、それなりに、彼なりの教養を身につけ、歴史を勉強し、現在のEUのことを分析し、それから、ネットで爆弾についての科学技術も学んで、そしてこういう結果に至ってしまった。いったいこんな勉強好きが、どうしてそういう決断を下してしまったのかというところに、私はすごく興味というか、懸念を持っています。

さて、ここからは先生方には釈迦に説法のことなんですが、『教養主義の没落』というのは、竹内洋氏を引くまでもなく、ずっといわれてきている。何十年もいわれてきている話なんですけれども、確認してみると、旧制高校的な制度のもとにあったデカンショ的な教養のイメージがありました。それは国家的であったり、普遍的であったりしようと思えますけれども、それはエリート養成制度、あるいはエリートとして自覚する人たちのものだという制度的な前提の上にあった。それが、戦後の段階では、だんだん大学が大衆化して

くる。教養部というものができますけれども、ついにそれが解体の憂き目を見る。1990年代ですね。一部生き残ったのが、ICUモデルといっていいかもしれません。東大にも教養学部というのはありますけれども、それが成功したかどうかは、私は分かりません。

しかし、その外に、大学だけではない教養の場というのが広がった。従来から出版、マスメディアがあり、そして最近ではネットの公共圏、あるいは、市民大学のようなものもそうかもしれないと思っています。

そういうふうに、教養の場とか輪郭が変わり得る、あるいは変わらざるを得ない。では、立教の描き出す教養の輪郭とは何だろうと。一つは、専門性に立つ教養人というスローガンがあるわけですが、それを制度的にどうやって形にするかという問いによってよい。すると、制度としては、確かに全カリがあるじゃないかという再発見になるのかもしれませんが。

私はある市民大学で吉見俊哉さんという社会学者の方とご一緒しています。吉見さんが最近書かれた『大学とは何か』という岩波新書があります。吉見さんは、先ほど西原先生からお話があった、中世の都市型の大学から近代に至る段階で、カントが一つのモデルを提出していることをおっしゃっています。カントのモデルは、神学部、法学部、医学部は上級学部であるとして、哲学部は下級学部とする。逆ではないですよ。前者は世の中の役に立つ学部ですね。哲学部は、とりあえず役に立たないけれども、自由な学部であると。この四者、両輪がないと大学は成立しない。その間の弁証法なんだというモデルです。

次は、19世紀以降の制度の話なんですけれども、ドイツなんかはいわゆるフンボルトモデルといわれて、そこに

は研究と教育が一致するのだという理想があります。しかし、それは現実には、難しいことで、学生にもいろいろなレベルの学生がいる。実際には選ばれた少数者が参加する集中ゼミ、残りは質のチェックも何もない放任教育だったという、日本の大学を彷彿とさせるようなことが現実にあったと紹介されています。

これに対してアメリカは、ヨーロッパと比べて「二流」と呼ばれていたんです。ジョンソンホプキンス大学の新しい大学長になったダニエル・ギルマンさんという人がカレッジの中を変えるのではなくて、別に、上に載せるグラデュエートスクールというものをモデルにしたんですね。これが、のちにハーバードなんかに浸透していく、アメリカ型の大学のモデルです。これは効果的であって、19世紀末から20世紀になると、世界の高等教育の中心はヨーロッパやドイツではなく、アメリカになっていった。これは一つの制度的なイノベーションです。

ただ、私が言いたいのは、ではアメリカ型がいいということではなくて、制度的な形はずっと模索されてきたし、相対的なものであるということであり

ます。それは、大学は誰のものかということにも関わってくるんですが、それは時代と共に移り変わっていった。帝国大学は国家のため、戦後は企業のため、あるいは大学教員の自己満足のため。しかし、60年代の学生反乱は、大学は学生のものだと異議を申し立てた。80年代、消費する学生のためのサービスになりました。そして、90年代以降は、グローバル、経営的でなくてはいけない。右であれ左であれ、エクセレンスがあればいい。大学が何かすごそうなことをやっている、それで格付けされるという話です。

同時に、大学の数が、これは私立大学が極端ですけれども、急増している。ところが、これは日本だけの問題ではなかったんです。高等教育機関への入学者数を見ると、日本以上に世界全体ではインフレ化しているのです。以上が吉見さんの説明です。これでは大学の輪郭は変わらざるを得ないわけですね。

では、そこで今度はどういう輪郭を描くかなんですけれども、オルタナティブIとして、コンピテンシー教育があります。古典教養ではなくて、コミュニケーション。英語、IT、ディベート、科学技術。それから、社会科学で言えば、統計学とか公共選択を取り入れた決定の技能。例えば、かつての法律は公序良俗という話をして、人身売買はいけないという価値観を示していたんですが、最近の法と経済学では、ルールAとルールBがあったときに、どちらのほうが効率的か、どちらのほうが効果があるかという語り口。法学者が経済学者と同じ言語で語れるようになっていなければならないというんですね。

オルタナティブII。これは、マイケル・サンデルの白熱教室のような、劇場参加型。私は、それはアクチュアルの問題設定、人間の肉を食べること、原爆はいいか、悪いか。代理母はいいか、悪いかといった生々しい話を、政治哲学の抽象的、原理的な座標軸でもってディベートし合うという話です。それを東京大学などでもやったわけです。

オルタナティブIII。これは中東政治研究の酒井啓子氏が書かれていたんですけど、専門知を結ぶシステムが必要だということですね。9・11のビンラディンたちの同時多発テロのときも、それから、去年から今年にかけての「アラブの春」のイスラム世界の大変革も、中東研究者は結局、予測できなかった、役立たずとして叱られたんだそうです。

でも、個々の研究者は、社会運動について、統治体制に対して、テロリズムに対してすごく正確な分析をしていた。どうしたらよかったのか。結局、それを見渡すのが評論家と政治家しかいなかった。そこで、学者個人が専門家と総合者を兼ねることは無理なんだと酒井さんは気づいて、むしろシステムとしてそれをやるしかないのではないかと。つまり、私たちは総合病院をつくるべきではないか、という提案をしています。

以上が3つのオルタナティブです。では、立教はどうするか、ということで、私の結論を申し上げます。立教大学はすごくきまじめにやってきたと思います。教養部の解体以前から、全カリというものに取り組んできた。昨今の大学でやっているリストラ型、あるいは、何でもいいから商品として売り込む型の大学経営ではないんですね。そういう意味で、全カリという一つのブランドをつくることができました。

その内容を見ても、「専門か教養か」とか、あるいは教養は専門のための基礎なのか、あるいは逆に役に立たないからいいのか。そういう二項対立的な呪縛を早くから意識して乗り越えてきたのではないかと思います。逆にその融通無碍なところが、高度に発達してしまった。PRO DEO ET PATRIAをとっても、解釈が広がってきたんですね。「神と国」にしないで、「真理と社会」という。そうすると、何となく全部善いものであり両立するようですが、実際のところは、国家と宗教というのは対立することがある。福音書のイエス自体だって「カエサルに税金を納めるのは律法に適っているでしょうか」と聞かれて、ものすごく難しい質問ですけども、これをお金に誰の顔が掘ってあるかと問い直し、「では、皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」と言ったという有名な福音書のエピソードがありますが、そういうぎりぎりのきわどいところで発揮する知とユーモアというものがある。立教の教育は、もしかしたら、もうちょっと柔らかいかな。やっぱりそれは豊かな人間性のための教育改革運動体という目的意識があるんですね。これを平野先生は批判されていますけれども。

このたびの全カリの、特に総合の改革は、私は、全カリとしては分かりやすい構造になったと思います。特に領域別科目群というのは、ある種の現実的な落としどころでもあるんですね。これは、教える個々の教員にとっても分かりやすいですね。自分が何を提供できるのか。無理をしなくていい。学生のほうについても、マッピングとして分かりやすくなったと思います。ものすごくスリリングな、新しいことを教えられる平野先生のような方はそうだと思いますけど、私にやれと言ってもすぐにはできない。では、平野先生は、サバティカルを使って、それを全カリに充てたらいいではないかという素晴らしい提案をされていますが、そのとおりで、それくらいやらなければいけない。

このように、領域別科目群をすることによって、単なるたこつぼの大学でもないし、逆に、日替わりで必死に学際的な新しいことをやらなければならないというプレッシャーからも解放されると思います。

ただ、分かりやすい、やりやすいことの先に何を指すのかということのをちょっと考える必要があります。結局、立教大学で教養を考えるというのは、何を指すのかということですね。教養論というのはしばしば、大風呂敷です。大学をどうするかとか、知の再構築をどうするかという大きな話ですね。日本のため、人類のための話です。では、

今ここにいる学生の判断力がゆらいでいると思われることについて、どうしたらいいんでしょうか。今の学生は、コンテンツにものごく触れています。にもかかわらず、触れやすいコンテンツであるネット、それから口コミにものごく依存して、疑うことを知らない、ものすごく素朴な勘違いをしていることもあります。それからいろいろ情報漏えいの被害者になったり、加害者になったりする。これについて単純にリテラシーを高めます、コンピテンシーを高めますという、レシピ的、自動車学校的な教育はもちろんできるし、しているでしょう。しかし、それだけでは判断力は高まらないわけですね。

かつて丸山眞男氏いわく、「あらゆることについて何事かを知っており、何事かについてはあらゆることを知っている人がいい」と言いました。これは、僕なんかも昔読んで、なるほどと思いました。そのころはできるんじゃないかと思いました。でも、今の情報量の中で考えたら、なかなかできないんですよ。そういうふうになることは。

現在、ネットの時代にいわれることは、編集の能力をつけなさいということです。世の中にいろいろあふれている、いろいろアクセスが可能な情報をうまく切り張りして器用に出しなさい。それは器用ということです。これだけではちょっと違うのではないかなと思っています。

立教大学は何をどう結び付けるか。それはつまり、生きるための足場をつくってあげる、あるいはつくれるようにサポートすることだと思うんですね。栗原彬先生はオーウェルの『絞首刑』を読んで、教養というのは情報の蓄積ではないと。身体が他の身体と交通しながら、自分と世界を知り、またそれを変えていく生への軌跡を思い描くんだと言っています。なるほどと思いまし

た。もっと素朴に言うこともできます。私は大学を出たばかりの学生とアイデンティティーの話をしたことがあります。それは女子学生だったのですが、今、若者は大変な時代にいると。いじめとか、家族の崩壊とか、失業とか。アイデンティティークライシスだとばかりいわれている。だけど、アイデンティティーというのは、失業しようが、家族が崩壊しようが、それでも自分に何か残ることをアイデンティティーというのではないですかと言われて、僕はそこまでアイデンティティーという言葉を深く考えていなかったの、あつと思いました。

つまり、さっき西原先生がおっしゃった言葉の受肉ですね。言葉が自分の足がかりになるならば、それは、4年間で1個でもいいんじゃないかと思うんです。そういうものを提供するのが教養教育なのかと思います。あとはディスカッションで意見交換していきたいと思います。

## 〈討論〉

○司会 それでは、再開いたします。こうやって好き放題しゃべりました4人を並べて皆さんに料理していただくという趣向なんですけれども、最初の料理役として寺崎先生をお願いしております。よろしく願います。

○寺崎 寺崎でございます。先ほどから楽しい時間を過ごさせていただきました。コメンテーターというのは、これだけお話が広いととても大変なんですけれども、幾つかの点について端的に、なるべく短い時間で申し上げたいと思います。

一つは、どなたもお触れになりましたが、前提として強調しておきたいのは、立教大学が持っている全カリという組織の「希少さ」です。これは



非常にまれな組織です。私は、いろいろな大学で、最近、特に教養教育の話をさせられますけれども、これほどの組織を持っている大学はございません。今、こういう組織をつくらうとすると、どこも大変困っておられます。立教は、幸いにして「全学出動方式」というような、私から見ればおぞましい言葉も全然使わないでやって来られました。それは今でも続いております。今日読ませていただいた概要のほうを見ましても、やはり全学部でその運営を担うところの組織だ、と書かれております。その通りであります。

かつては、「全学に支えられる全カリ」と申しておりました。一度も変な言葉を使わないで、しかし、いろいろな領域の先生方がこれに力を注いでくださる。あの姿そのもの、そして、それを可能にしている組織というのは、やはり非常に重要だと思います。今日もお話を聞きながら、あらためてそのことを感じております。

2番目は、今日のお話で、領域別科目、総合科目部分のことからいろいろお話が出ました。私には、これはやはり大きく見ると、知と人間とのかかわりをどう考えるか、という問題に根ざしていると思われるのですが、大変な難題で、ディシプリンと人間との関わりをどうとらえていくかということになります。

具体的な問題から申します。一つは、他の領域の学生たちが聞いてくれる科目をやるといふとき、非常に困難さは、その聞いてくれる学生たちが、自分の領域のことすらまだ模索中だということなんですね。それなのに、他の領域の入門を聞く。果たしてその彼ないし彼女に両者の「関係」みたいなものが分かるだろうかということ。僕は、これは非常に大きいと思います。先ほど「知の関係を問う」という言葉がありまし

たけれども、よく分かっていない両者の間でその「関係」を問うことができるか。これはやっぱり非常に困難な問題だと僕は思います。

もっと具体的な問題として、先ほど家城先生がお話しされたことの中にございました自然科学において「入門」というのは、実は非常に難しい部分なのだ、という点です。他領域の者から見たらほとんど分からないことだ。そうだと思います。友人で物理学専攻の者がおりましたが、彼が一番最初にやらされたペーパーというのを見てみたら、僕などからすればまるで呪文です。呪文が紙いっぱい書いてある。あれが「入門」であるなどといって示されたら、何も分からないと思いますね。ですから、入門だから易しいということはありません。

つまり、関係があいまいである、それから、入門であるから易しいとは限らない。この2つを並べてみると、そこを突破していく技法がものすごく重要になってくると思います。どうやって突破するかという問題ですね。

ポイントの一つは、平野先生がメモの中でお書きになっていますけれども、スリリングな主題を選ぶということです。この選択は、実は極めて重要ではないかと思えます。のちほどその根拠を申し上げます。

2番目は、言葉についての問題。他領



寺崎 昌男

域の学生たちに自分の領域のエッセンスを話す、その言葉ですね。これはものすごく重要で、平野先生は、そこを「訓練」とお書きになっていますが、重要な訓練になってくるだろうと思います。

私の例で申し上げます。はるか昔の体験ですけれども、私が東大教養学部1年生のとき、当時は文科第Ⅱ類といって、文学部ないし教育学部に進む者が行くコースに所属していましたが、そのとき自然科学系をどうしても3つとらなくていけない。そのうち、どうせ落ちるだろうけど、とにかくとっておこうと思ってとったのが「物理学」だったんですね。その担当者が、幸いなことに竹内均という、当時の宇宙物理学の講師でした。ずっとあとで、『Newton』という雑誌の編集長として登場されたので、ああ、あのときの先生かと思いました。この先生の半年間の講義、4単位でしたけれども、これは非常によかったですね。今でも忘れられない。竹内先生が選ばれたテーマは、「原子力の発見」というテーマでした。先生は、どうやってあの原子核エネルギーの発見が進められたか。どういう科学者たちがそれに協力したか。彼らはその成功をどう迎えたか。それから、原爆の開発にすすみ、それがああいった結果をもたらしたときに、一人一人の科学者たちは何を思ったか。これをいろいろな科学者の具体的な伝記等々引きながら、半年間教えてくれたんですね。これは、僕はものすごく面白かったです。私は原子力という話を聞いたときに、あのときの授業を今でも思い出せます。

ポイントは3つありました。一つは、何と言っても1951年ごろに、原子力の発見というテーマを先生が教養科目の内容として取り上げられたという、その選択ですね。さすがだったと思います。2番目は、そういうテーマ選択を

した上で、僕らに分かる言葉で語ってくれたということがあります。第3は、決して竹内先生は倫理教育をなさらなかったということでございます。1951年のことですから、まだ原爆が落ちて6年しかたっていません。そのときに平和とか、戦争とか、あるいはその他、ナチスの問題性とか、そういうようなことに先生は一言も触れられませんでした。教えてくれたのは、ひたすら認識でございました。僕らの認識を、原子力発見というテーマにどうつなぐか。これに腐心して下さった。これが実によかったですね。

現在、特に教養教育に関していろいろなところから、大学はしつけをしろとか、大学は倫理教育をやれと言われます。あれについては、根本的に問題があると思っています。それは家庭教育の仕事、あるいは個人の修養の仕事であります。大学はやはり認識の形成というところに重点を置くことであって、規範について言うと、規範の成立根拠を教えるべきであって、規範そのものを教え込むべきではないと思います。

時間もぎりぎりになっていますが、最後に平野先生に一つだけ申し上げたいことがございます。どうも承服できないのは、シラバスについてのご意見です。平野先生は、シラバスのような知の展望を全部俯瞰できる資料を配るといような活動は、学生の興味とか驚きをさますとおっしゃっています。私はそうではないという気がします。

まず前提にあるのは、講義内容とシラバスは違うということです。シラバスと言っていますが、本当は各個人の先生が自分の責任で自分のクラスの学生にだけ配る文書だと聞いております。一方、我々が印刷されたものとして目にするのは講義の概要なんですね。講義概要とシラバスとは全然違います。

シラバスのほうには、それぞれこのところでのテキストを読むことにするというのをきちんと書いておけばいい。それはどんなに書いておいてもいい。その代わりにその後の瞬間瞬間に驚きやわくわくを保障するのは教員の仕事だということです。別の言い方で言いますと、シラバスは本来契約書なのです。学生との間で交わす契約書だといわれています。驚きを生み出すという契約書だと言ってもいいでしょう。

さらに重ねて申し上げますと、オックスフォードに行った留学生からもらいましたが、あのオックスフォードで行われるあらゆる種類の試験問題が1冊の電話帳のような本になって全学生に配られるんですね。それを見て驚きました。全部の科目の試験問題が全部書かれている。それは大学の、説明責任の一部となっていて、今ここで取り上げられるように、愚かな提案とは言えないのではないかとこの気がいたしております。問題提起のせいでぎりぎりになりまして、どうもすみません。

○**司会** 寺崎先生、ありがとうございます。寺崎先生は、全カリの初代部長をされて以来、全カリの歩みをずっと温かく見守ってくださっていた先生です。愛情あふれたお話でした。最後は、ちょっと辛口のお話が出ましたが。

これに対する平野先生のリプライからお話を展開していけばいいのではないかと思いますけれども、平野先生から、いいでしょうか。

○**平野** 寺崎先生、どうもありがとうございます。私はシラバスという書き方をしているのが、自分自身が用語の混同をしているということだと思っております。ここで言いたかったのは、もちろん説明責任として、あるいはこういうことをやるぞということを書くのはいいけれども、私自身としては、一番

言いたかったのは、学問の世界には市場原理は持ち込まないということなんです。ですから、そこに書きましたけど、簡単に言うと、教育パッケージという言葉を使いましたが、予備校の参考書とか、そういったものに近いものに、大学の授業がなるべきではないし、また学生との契約書であるところの講義内容というものが、出口まで全部書くようなことをするべきではないのではないかとというのが、私の書きたかったことで、用語の混同によってこのような誤解、誤解ではないのかもかもしれませんが、私はそのように考えております。

○**司会** というあたりで、今、その他のところは、各先生、よくよく見ると、相当異なる、ある意味では相互ぶつかるような意見をいただいておりますので、お互い同士、おっしゃりたいことが恐らくおありだと思います。どうぞご自由に拳手をされて、各人の話したことに関してでも結構ですし、あるいは全カリ、ないしは教養教育についてのご自身のご意見でもいいんですが、ご自由に発言いただきたいと思っております。

○**参加者** 大変刺激のお話をありがとうございました。物理の家城先生にちょっと質問させていただきたいんですが、一般学生に専門分野のことを分かりやすく説明するのは大変難しい、一番難しいだろうと思うんですが、その例として、挙げられた事例を通して自然科学の考え方を理解していくという方法があるのではないかと。そういうアプローチの仕方はとてもいいと思うんですが、もう一つ思いつきましたのは、今、学者に対する一般の信頼が非常に大きく揺らいでいる時期だと思うんですね。一般の学生からすると、科学者というのは本当に信頼できる人なのだろうか。大きな事故を目の前に



して、専門外と言いつつ方々を見てしまっていて、その辺について随分、疑問を持っている人たちも多いと思うんですね。問題の一つとして、一般人が科学者に期待するものは何なのかと。あるいは、科学者はここまでは分かっているんだけど、ここから分からないということを手直に伝えていく。それでしたら、一般人が科学に対して興味を持っていくのではないかと思います。それは全部が分かっちゃまっているような講義の仕方ではないと思いました。

○家城 全くおっしゃるとおりだと思います。もちろんそう言っているつもりではあるんですが、科学というのは当然、分かっているところと分からないところがあって、分からないほうが多いわけですね。どこまで分かっているかをきっちり言うというのが、ある種、大事だし、難しいところであるかと思えます。

「専門外だから」というのは、逃げ口上でもあるんですけども、まじめに考えると、やっぱりいろいろなことを聞かれたときに、ここまでは自分に分かっていること、一般的に分かっていることとして答えられる。だけど、ここから先は状況によってどちらもあり得るということがあった場合に、それに分かる範囲で答えるのか、それは無責任になるから答えないかというところが出てくるかと思えます。だから、どうしても「そこは専門外だから」という

言い方をしてしまうところがあるんだけれども、それは今おっしゃったように、そこまではっきり分かっていない、あるいは、知っている人がいるかもしれないけれど、自分にはそこは正しく認識されていないという言い方をせざるを得ないこともあるのかなと思います。我々もそれは言葉を選んでしゃべるべきだと思いますけれども、おっしゃった趣旨は全くそのとおりだと思います。

○司会 先ほど手を挙げられた方、どうぞ。

○参加者 法学部の原田と申します。平野先生、また西原先生と一緒にこの2012年の全カリ総合改革のお手伝いをさせていただいたので、その当時の議論を少し思い出しながら拝聴いたしました。特にその当時、たしか平野先生、また私も、この文献系科目のシラバスをいったん書いてみて、どんなシラバスを書いて、どういうことをやるんだという話をたしかしたような記憶がありますので、実際に平野先生がそのときにどういうことを考えて、そのときのシラバスをお書きになったのかということを考えて聞いておりました。

平野先生の講義を聞きますと、あの人は何か変な人だけど、面白そうなことを面白くしゃべっているような気がするということがよく分かると思いますか、そういうような講義に聞こえませんでした。私には全くその面白さが分からないのですが、ご本人が面白がっているのはよく分かる。

ただ、知的好奇心の旺盛な人間が、別の、よく分からない知的好奇心の旺盛な人間を見ていて、何か楽しそうにしているな、これは何かあるぞと思うようなことは、私が一つの山を登ろうとしているからそう思うのかなとも思えます。これは、先ほどの寺崎先生の質問ともかかわるのですが、これを学生が見たときに、例えば、ここにいる大

半の方々は、知的好奇心が極めて、世の中の平均数に比べて旺盛すぎるという方々なわけですから、そうではない、学部1年生が平野先生を見たときに、「あの人は何をしているんだろうか」と思うのではないかと余計な心配をしてしまう。これは、先ほど申し上げたように、関係性を問う前に、まずディシプリンがしっかりしていない。そうした学生が聞いたときに、平野先生はどう映るのかな。楽しい先生ではあるんだけど、これによって知的好奇心をくすぐられてスリリングになるのかな、それとも、単なる変わった人なのか。どういうふうに映るのか疑問に思います。こちらはその設計にかかわった人間として、すなわち、知的好奇心が平均以上の人間として設計したことによる、何か問題みたいなものがあるのではないかと、寺崎先生の話聞きながら思いました。

コメントは特段求めておりませんが、もしございましたら、よろしく願います。

○平野 そのとおりでございます。原田先生、どうもありがとうございます。学生もどうもそのように思っているらしくて、何か面白いことを、この人は面白がっているらしいけど、自分たちは面白くないと言われることもままありますけれども、同時に、これは文学部の学生を相手にやっているからだということもあるのかもしれませんが、学生自体がそのうちだんだん興奮してきて、どっちが教員か分からなくなるということもあります。これは自分の名誉のために申し上げておきます。だから、私一人が踊っているわけではなくて、全員がキリギリスになるように、なるべく気をつけているところです。

○司会 よろしいでしょうか。あと、手を挙げられた方、どなたかいますか。

○参加者 3名の先生から、全く違った



視点から同じテーマを語っていただきまして、非常に面白く、興味深く聞かせていただきました。ありがとうございます。

2つ質問があるんですけども、1つは、自然科学の家城先生で、私は、例えば、『TIME』の雑誌でアインシュタインの特集があったときに、相対性理論というのをイラストを交えて簡単に、非常に分かりやすく書いてくれている。そのようなことをすごく興味深く読むんですが、あと、たまたま自分で必要があって、量子、quantumに関して、少しは理解しなければならない必要があって、波と粒子というようなアイデアをウィキペディアで読んで、最初のほうは理解できるんですが、あとのほうになって理解できない。でも、最初のところの分かりやすい説明というのはすごく興味があるので、そういったようなことを、数字を使わないで概念みたいなものを説明できる講義があるといいんじゃないのかなと思いました。そういう可能性はないでしょうかというのが一つです。

もう一つは、法学部の小川先生への質問で、非常に大学、そして教養というものを網羅的に整理して説明していただきまして、勉強になりました。ただ、いろいろなアイデアが出されていて、そのどれを先生が支持しているのかというのがよく分からなかったんですけども、一つ、例えば編集能力、あれ



はいろいろな情報を、自分の判断力でどれを取っていくかということのかなと理解したんですけれどもいかがでしょうか。

それと、最後に非常に興味深く聞かせていただきました。学生が自分の経験から、アイデンティティーというのはこういうものではないか、と言ったことについて、4年間で一つの言葉の意味を生身で理解できれば、それで本望であるというアイデア。その2つのアイデアというのは、つながりがあるんでしょうか。だから、両方とも先生が目指しているものなのか、あるいは、ただ、こういう方法もあるよ、こういうこともできるよという提案を投げかけていらっしゃるだけなのか、おうかがいしたいと思いました。

○家城 量子論、相対論というのは、理系、理学部の場合ですと、大体2年生、3年生ぐらいで勉強する科目なんです。おっしゃったように、いろいろな雑誌等で、今取り上げられている。ノーベル賞などを契機にして取り上げられますし、比較的分かりやすく図解されて出ているものもある。それはそれで非常に役に立つし、そういうものを授業でもというのはあり得るかなと思います。

ただ、理系の学生に教えている各科目では、それを理系の学生には積み上げて数式を使って説明しているわけですね。自然科学が、こういうデータのものがある面白さというのを伝えるだけであれば、それでも構わないし、さっきの山のたとえで言えば、NHKの番組みたいなもので、ヘリコプターで一気の上まで行ったら非常にきれいなものが見えると。そのレベルは、たぶんいろいろなやり方があると思います。それはそれで必要なんだと思いますが、自然科学という意味では、それがどうほかのものにつながるかということ

が大事なんだと思うんですね。そうすると、数式にこだわらなくてもいいのかもしれませんが、関係性みたいなものと、波と粒子がこんなのであるという定性的な説明だけではやっぱり収まらないところがあって、それを敷衍していくとどんなものにつながっていくのか。ほかにどんなものに関係しているのかということまでもっていきたいということになると、なかなか難しいものが出てくるのかなと思っています。

ちょっと質問の答えになっているかどうか分らないのですが、文系の方々にそういうことをやること自体は可能なんです、それをやったとして、ああ、面白かったで終わってしまうのか、それが自分の何につながるのかという、どこまでのレベルを到達目標に置くかということ、境目になるのかなと思います。

さっき平野先生が、所属学部と異なる学問に興味移って、ほかの学部へ転部する学生がでるかもしれない、と言われましたけど、我々の立場から見ると、そういうのが面白かったら、もう一度勉強し直して理学部に入ってもらえるとありがたいと思います。

○小川 あまり深い質問をいただいたので、逆に全部考え直させられているのですけれども、専門と教養の2つが対立したり、あるいは補完、分業するのかなと思ったのですが、今のご質問を聞いて、むしろ同じ大学が生み出す知のある方向、角度から見ることで、別の角度から見るができる。その一つが教養なのかなと思いました。

ということは、器と中身の問題になってくるんですけれども、例えば先ほど幾つかのオルタナティブを示したとき、私がとりあえず触発されたのはオルタナティブⅢで示した、1人ではなくて総合知をつくっていくチーム研究

です。ところが、これはかたちだけやっても失敗するんです。巨額なお金を競争させて注ぎ込むCOE型というか、無理やり人を集めて何か共同研究しますと言っても、本当に質が高いのか分からないですね。制度とか組織は器です。教養教育をするときに、旧教養部もありましたけれども、それは、しかし制度上の分業であって、実際に個々の先生はずっと専門を維持している場合が多かったと思います。

そこで、中身と合った器についてどう考え直すかなんですが、先ほど物理の話が幾つか出てきました。私は数物連携宇宙研究機構長の村山斉氏と学生時代、たまたま同じ寮に住んでいました。『宇宙は何でできているのか』というベストセラーの本を書かれた方ですが、その後、彼は、アメリカと日本を行き来しながら、誰にでも読めるけれども、宇宙研究の最先端を紹介する仕事も専門研究のかたわらされたんですね。

ということは、非常に根本的であること、あるいは、全体的であること。そして、最先端であることを、人によっては伝えることができる。井上ひさし風に言えば、むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく。誰にでもできることではないかもしれませんが。だから、私は、全学部で支える立教全カリ型というのは、組織上、体系的なモデルを作ってくれていますけれども、自分自身としては、それをきちんと受け止めて、できることなのかどうか、分かりません。ただ、教養というものは、それぞれの角度から世界を新しく認識するということなのかと思います。それをどうやってチーム化・制度化していけるのか。自分も、スーパーマンではないけれども、そこに何か参画していくことができるのかというのをご質問を受け

て問われた思いです。

○司会 よろしいでしょうか。もうそろそろ時間なんですけど、もうお一方、二方は受けることができますけれども、まだ料理がし足りないと思っていらっしゃる方が多いでしょうから、どなたでもどうぞ。

○寺崎 重ね重ねの発言ですみません。学生の皆さんに授業をしておりましたころのことを思い出します。

「教育学概説」というのが、僕らの講義の題目なんですが、教職課程の授業でございましたから、相手は固有の学生が一人もいなくて、全部、どこかの学部の学生なんですね。あのころのことを思い出しますと、一つのコツ、つまりテーマ選択のコツは、誰でもみんな、履修している学生が一応知っていることがいいと思うんですね。誰も分からない最先端のテーマをいきなり掲げては、向こうも分からないし、こちらもまた、先端だけを切り取って話しているようで、つながらない。

ですから、私は「教育学概説」の最初の入門導入のテーマは不登校、登校拒否を考えるとということにし、3時間たっぷり時間を費やしました。それは、学生にとってみれば、たくさんある問題の中の一問題、小テーマに過ぎません。しかし、そこを突っ込んで教えていくと、いつの間にか、現代社会において学校とは何かといった話にずっと広がる可能性がある。しかも、彼らは自分も学校を辞めようかと思った経験を少なからず持っているというような事実があります。学生たちと共通の場をつくるには、例えば、そういうようなことを少しずつ積み重ねていかれたらどうかと思います。テーマ選択、伝える言葉の問題とか、いろいろなことがあります。余計なことを、すみませんでした。

○司会 誰でも知っていることを入り

口にするというのは、まさに最初に平野先生の授業でなされたことなのかなと思います。貴重なアドバイスをありがとうございます。

そろそろ時間も迫ってまいりましたので、最後に閉会のあいさつをお願いしたいと思います。本来でしたら、全カリ副部長の藤原先生にお願いするところなのですが、今日は所用でおいでになれないので、総合チームメンバーの下地先生にお願いしています。よろしくお願ひします。

### 〈閉会挨拶〉

○下地 総合構想・運営チームの下地と申します。この2年間、チームメンバーをやらせていただいています。今日は本当にどうもありがとうございます。もう今年も早いもので立冬を過ぎまして、外はかなり寒くなっていると思うんですけども、この中は非常に熱気のある議論ができたのではないかと思います。

まず、総合チームのメンバーである立場からは、あまりふさわしくない言葉かもしれませんが、今日お話しいただいた、主に5人の先生方。寺崎先生のコメントを含めて5人の先生方、本当にぜいたくな時間をありがとうございますと申し上げたいと思います。

久しぶりにというか、それぞれ領域の違う先生方なので、非常にいい勉強をさせてもらったと思います。冒頭に、全カリ部長の青木先生が、今日の議論から、結果として別に収束する必要はないんだけど、でも、次年度のカリキュラムを具体的に展開していくにあたっての助走になるのか、それとも抽象的な議論に終始するのかということをおっしゃいましたけれども、この両方がある程度、満たされたのではな

いかと思います。

少なくとも、次年度カリキュラムへの助走ということ言えば、今日お話しいただいた平野先生、西原先生、家城先生、小川先生が、直接の授業をされたのは平野先生ですけれども、それぞれ我々にとって模擬授業として伺うことができたのではないかと思います。ここにいろいろなヒントがちりばめられていて、平野先生と西原先生は文学部の先生らしく、それぞれが十八番を披露されましたけれども、家城先生はディシプリンの入門と言われながら、スリリングなテーマとかといわれると非常に当惑してしまうという疑問を投げかけられました。これは理学部である以上、必然的にわき上がってくる疑問だと思います。その当惑を、議論されながらも、『アルプスモデル』というものを披露されまして、市民にとっての科学的リテラシーはどうあるべきなのかという道筋をある程度示していただけだと思います。そこに、理学部生のみならず、全学生にとってのヒントというものがあったと思います。

そして、最後の小川先生は、最初にノルウェーの非常にショッキングな事件というところから入られまして、これまでの大学論、教養論も整理されまして、最後に非常に重い問いを投げかけられました。今ここにいる学生たちの判断力をどうするかという問題ですね。

我々はずっとこの全カリ改革のことを議論してまいりまして、2012年度というのは、これは私ごとになりますけれども、全カリが発足した1997年に、ちょうど私もこの大学に赴任いたしました。数えてみたら来年はちょうど15年目でした。15年目の節目ということで、今回の改革の目玉というのが、寺崎先生は、この本学の全カリの、組織としての希少性ということをおっしゃっていただきましたけれども、各

学部のかかわり方の新しい側面を意図的につくり出していくというところにあるのだらうと思います。そして、そこには、今日はちょっともう整理しきれませんが、たくさん課題が、今日の先生方のお話の中で出てきたのではないかと思います。

改革というのは、常にまだ見ぬ、学生たちのためであって今日この場に学生の方の参加というのはあったかもしれないんですけども、数としては圧倒的に教職員の側が大多数だと思います。仮にここに学生の方がいらっしやって、学生の声が聞けたとしても、改革後の授業を直接聞くのはまた異なった学生たちということになります。

今日の寺崎先生の話で、「専門と教養の間」でと書かれていますけれども、実は学生たちにとっては、何が何の専門であり、その専門と専門の間が何であり、専門と教養の間が何であるかということ、区別できない段階の中で聞いているんだということがありましたけれども、このシンポジウムの話が深まっていく中で、最後の小川先生の教養の定義というのがありましたけれども、実は我々にとっても何が専門であり、何が教養であるかということは、明確なものがあって、その間があるということではないんだということが、少なくとも確認できて、抽象的な議論ということ言えば、そのあたりから、次年度以降、我々がまだ見ぬ学生たちがどんな反応をしてくれるのか。そこにいろいろな答えが出てくるのだらうと思いますし、今日挙がってきたさまざまな課題を今後検証していく出発点として、きょうのシンポジウムは大変有意義であったのではないかと考えております。

ちょっと整理はしきれませんが、本当に今日、人間の生理的にはそろそろ限界に近づきつつある時間かも

しれないんですけども、最後までどうもありがとうございました。

○司会 長時間どうもありがとうございました。若干時間を超過しましたが、これで終わりにしたい

と思います。最後に、スピーカーの先生方に盛大な拍手をお願いいたします。



下地 秀樹